

UNHCRと日本国連HCR協会 国際協力フェスティバルに参加

国際協力に携わる国際機関、政府機関、NGOそして新たに在日の大使館など約200団体が一堂に会し、「国際協力フェスティバル2003」が10月4日(土)～5日(日)、東京の日比谷公園で開催された。

今回のUNHCRのブースでは、パネルによる活動紹介の他、「難民キャンプでの一日の食料」の紹介やアフリカ難民・帰還民の写真展示、資料の配布などを行った。

会場では、インターンや学生ボランティアが来場者に説明し、また在日の難民

アーティストによるペーパークラフト教室なども開催された。

今年は、UNHCRに協力するNGOの協議会であるPARinAC(パリーナック)との共催で「難民支援スタンプラリー」も実施した。約100人の参加者が、広い会場14か所に点在するラリー参加団体の出展ブース全てをまわり、記念品を手にした。

また「アフリカ難民に水を！」募金キャンペーンを進める日本国連HCR協会が、スイート・ウォーターと(株)日田

天領水の協力で、来場者に飲料水を配りながら、安全な水の不足に直面している難民への関心を持つよう呼びかけた。

両日とも好天に恵まれ、幅広い世代の方々が多数ブースを訪れ、大盛況のうちに2日間の出展を終えた。

在日の難民からペーパークラフトを習う学生たち。



UNHCR親善大使、主演映画 「すべては愛のために」まもなく公開

UNHCRの親善大使であるアメリカの女優、アンジェリーナ・ジョリー主演映画「すべては愛のために」(Beyond Borders)^注が、12月20日から日本でも公開される。10月20日にはニューヨークでこの映画の特別チャリティー試写会があり、ジョリー本人のほか、コフィー・アナン国連事務総長、ルード・ルベルス難民高等弁務官、ヨルダンの女王などが出席した。この映画は、人道援助に

関わる男女が1984年エチオピアで、89年のカンボジア、そして95年チェチェンでの援助活動を通して惹かれ合うという物語であるが、昨今の難民援助の現場におけるさまざまな難しさの一面が描かれている。また、日ごろ脚光を浴びない地域で活動するための資金繰りの厳しさも示されるなど、現在、UNHCRをはじめとする人道援助機関が直面している問題にも触れている。

2001年8月にUNHCRの親善大使となったジョリーは、UNHCRに多額の資金援助をしてきたほか、世界各地の難民キャンプを訪れ、そこで暮らす人々の話に耳を傾け、難民が置かれた状況を多くの人に訴えるべく活動を行っている。ジョリーが難民キャンプ訪問時に自ら綴った記録も出版される予定。

注：Beyond Borders (原題) — エチオピア、カンボジア、チェチェンと10年にわたる“国境をこえた”人道援助活動を通して育まれた愛の物語。



UNHCR 日本・韓国地域事務所に 新代表着任

2003年9月29日、ビルコ・コウルラ(Pirkko Kourula)新地域代表が、カシディス・ロチャナコン前代表の後任として着任した。

コウルラ新代表は、就任にあたり次のように語った。「まず、長年にわたるUNHCRと難民問題へのご支援に、日本の皆さまそして政府に感謝の意を表します。今後とも日本政府、諸団体、NGO(非政府組織)による援助が、より“目に見える”ものとなるよう努力してゆきたいと思います。

日本の現行の難民保護制度、特に難民申請者(庇護希望者)への対応が改善されつつある動きを歓迎したい。また、日本に来た難民の人々が社会に適応できるよう取り組んでいただけることも嬉しく思います。『出入国管理及び難民認定法』の改正を見守っていきたいと考えています。

また、UNHCRと関係団体との良好な協力の継続に期待しています。NGOや他のパートナーとのパートナーシップを強化し、さらに日本国内のNGOや難民の支援者と政府機関との対話も推進していきたい。個人的には、日本各地を訪れ、日本文化を学びたいと思います」。

新代表はフィンランド国籍で、ヘルシンキ大学で法学修士、オックスフォード大学で国際法のディプロマ、ラップランド大学(フィンランド)で法学博士を取得。1981年、UNHCRに入り、過去20年間、タイ事務所を初めとして、ジュネーブ本部にて法務官や執行委員会の事務局長、さらにニューヨーク事務所に勤務してきた。その間、弁護士や外務省職員の実験もある。日本赴任直前は、ジュネーブ本部の高等弁務官官房で、「UNHCR 2004」首席顧問 兼 副議長を務めていた。既婚で2男の母。



追悼

凶弾に倒れた アナレナ・トネリー医師 2003年ナンセン賞受賞者殺害される

UNHCR東京事務所
広報官

はこぞきりか
箱崎律香



UNHCR/R. Hakozaki

今年6月、ナンセン賞を受賞したイタリア人女性医師、アナレナ・トネリー氏（60歳）が10月5日、彼女が運営するソマリア北西部のボラマにある結核専門病院で、何者かによって頭を銃で撃たれ死亡した。彼女の死は、UNHCRを始め多くの人道援助職員に衝撃を与えている。

30年以上にわたり、紛争や貧困で苦境に陥ったソマリア人たちの救援に当たってきたトネリー医師の活動は、前号で紹介したばかりだ。しかも、私は幸運にも、今年の4月にソマリアで彼女と直接話をする機会を得た。

トネリー氏は、不思議な暖かさと愛情を身におびた人物であった。これまで出会った人々の中で、「何か違う」とこれほど強く感じた人はいなかったと記憶している。どう表現するのがいいのかわからないが、生身の人間というより「聖人」に近い印象で、深い感銘を受けた。一方、彼女がまだ60歳だと聞いて目を疑ったことを覚えている。とても上品な雰囲気の人であったが、同時に、さまざまな苦勞と困難を乗り越えてきた深みを感じさせる人であった。

忙しい時間に訪問したにも関わらず、トネリー氏は「話し始めたら止まらない」と病院職員が言う通り、次々と病院や患者の説明をやや早口にしてくれた。ところが、彼女との話は1分と続けられない。なぜなら患者や職員がひっきりなしに部屋を訪れ

るからだ。彼女は「ちょっとごめんなさい」と言うと、頼ってくる人々に、今度はソマリ語で話しかける。大人たちは「トネリー氏を「お母さん」と、子ども達は「おばあちゃん」と呼んでいたらしい。職員にはテキパキと指示を与え、患者たちには、時にはやさしく具合を尋ね、またある時には、何かをしかっているようだった。その毅然とした態度は、逆に、彼女を実際の年齢よりずっと若く見せていた。

「私には何の財産もないのよ。銀行口座もないし、家もない。持っている物といったら2着の服と、今、履いているサンダルくらいかしら」と、にこやかに話してくれた。常にまとっているスカーフも、職員からの贈り物だ。トネリー氏は、18歳の時から物は持たないことにしているのだという。そんな彼女に、「どうしたらそこまで自分を犠牲にできるのか」と聞かずにはいられなかった。するとすぐにこう答えた。「自分を犠牲にしたなんて思いません。それにこれまで『困難』だと感じたこともありません」。

しかし、家族に大反対されながらも、苦しんでいる人のために人生を捧げると決心してイタリアを後にしてから、これまでに、何度も危険な目に遭ってきた。時には拘束され、ひどく殴られて顔の骨が折れたという。さらには殺されそうになったり、同僚が目の前で殺害されたこともある。こうした想像を超える厳しい状況下で活動してきたのだ。「これまで大変な思いもしましたが、一度も辛いとは思いませんでした。銃を持った反乱軍に囲まれても、死を恐れたことはありません」「一度ソマリアの人々を愛したら、死も恐れるに足らなくなるのです」。

どうしたらそんなに強くなれるのか。トネリー氏は「神が勇気をくれるのです」と繰り返し言っていた。人間は一度しか生きられない。だからこそ、彼女は人生を他人のために捧げたいのだという。そして、たとえば、たった一人でも、世界

のためにできることがたくさんあるのだと話してくれた。

彼女の案内で病院を見せてもらった。簡素な病室に多くの患者が入院していたが、いたる所に彼女の気遣いが見られた。「どんな患者にもできる限り清潔な環境で気持ちよく過ごしてもらいたい」という彼女の姿勢が伺われ、不十分なりネンを補うために、寄付されたタオルを縫ってシーツや枕カバーにしていた。入院患者の家族の中には家のない人もいるため、敷地内に住ませるなど、患者と家族との絆も大切にしていた。

当時、UNHCRの援助で二階建ての診療室が建設中だった。壁のペンキもまだ完全に塗られていないその建物を案内しながら、何をどこに置こうと思っている、と嬉しそうに語っていた彼女の笑顔が忘れられない。「世界の人々が、心のあり方と態度を変え、他人を信頼し、心から愛し、物事を前向き考えられるようになれば、希望は見えてくるのです」。

自己よりも他人を大切に続けたトネリー氏が、このような形で凶弾に倒れたことは、ソマリアの人々にとっても、また人道支援に携わる多くの職員にとって痛恨に堪えない。各地で暴力やテロが罪のない人々の命を奪う事件が相次ぐなか、援助活動の現場にも変化が見られる。トネリー氏を含め、人道援助職員がこのような劣悪な行為の標的にされる危険性が増し、職員の安全保障に対する懸念が高まっている。このような悲劇が再び起こらないことを願ってやまない。



故トネリー氏が自ら運営していた病棟のひとつ。UNHCR/R. Hakozaki